

震災からの復興と児童生徒の安全・安心

兵庫教育大学大学院

教授 富永良喜

先ほどの3人の先生方のご発表を受け、また諸先生方との出会いに感謝しつつ、防災教育と心のケア・心のサポートの視点で発表する。

以下の三点が重要である。

1. 防災教育とこころのサポートを一体にして進めることが必要。避難訓練の時の指示のことば、事前の練習のあり方、災害にともなう体験の表現活動、それが語り継ぐ防災教育へとつながる。
2. 災害を体験して自責感を強く抱えすぎることがストレス障害の大きなリスクファクターになるということから、自責感をやわらげ、前向きに生きるエネルギーにすることが必要。「津波でんでんこ」はこのための工夫の一つと聞いている。
3. この教育研究発表会に代表されるように、良い取り組みを分かち合うシステムづくりが必要。

次年度には次のようなことが求められる。

科目として「防災教育」や「心の健康教育」を設けることは無理としても、各学校が工夫して年間スケジュールの組み込むこと。大槌高校の高橋先生の発表にもあったように、保護者・地域の人への心の健康教育や保護者からみた子どもの心とからだのアンケートなどの実施。教職員の分かち合いとセルフケアとリフレッシュ、メンタルヘルス支援。子どもの心の健康教育の継続・発展と個別相談体制の確立。

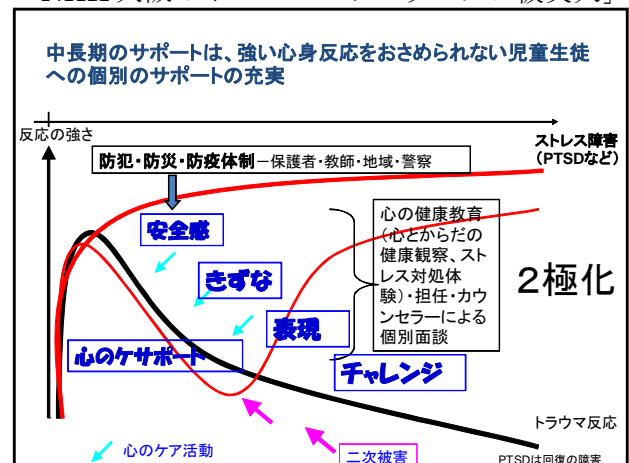
教育新聞で「震災・津波に伴う経験はそれぞれ貴重な教育的価値を持っています。」と菅野洋樹教育長は述べられた。釜石の「奇跡」は決して

奇跡などではなく、先ほど報告された先生方の取り組みも含めて教育の成果である。

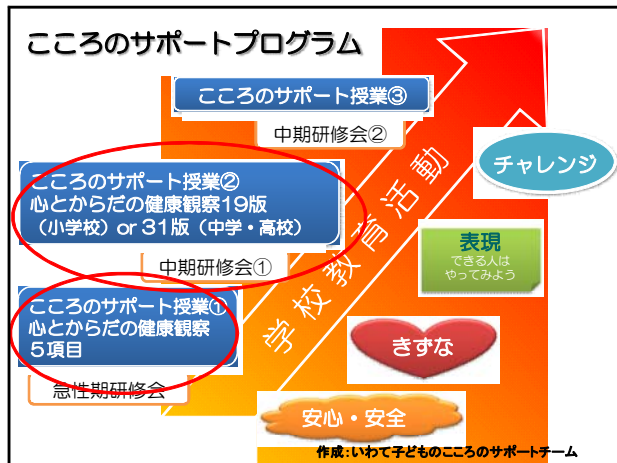
一方、津波で多くの子どもが亡くなった小学校で生き残った先生のコメントが新聞に掲載された。私は彼に、この体験を語り継ぎ、次世代の命を守る声として生き抜いて欲しい。岩手のさまざまな津波の歴史を彼に届けて自責感情を抱えずに、前に向かって歩んで欲しいと思う。

被災・被害体験をどう扱うかはこの20年で大きく変化した。神戸の際は、つらい体験をできるだけ早く表現することが勧められたが、9.11以降は過覚醒など自分の気持ちをコントロールできなくなることから逆効果とされている。安全感・安心感が保障されていない中で、被災・被害体験を表現させようとするのは二次被害を与える。現在では、初期の対応としてはまず落ち着くこと、良い体験を培うこと、その上でつらい記憶にも向き合うことが求められている。一方、被災・被害体験の記憶を封印し続けることもストレス障害のリスク因子である。ある時期からは、被災体験を表現させることが大切になってくる。

NHK 大阪のホームページ「リエゾン被災人」



もご覧いただきたい。阪神・淡路大震災当時 15 歳だった女性の記述を見ても、親にも話せないままつらい日々を過ごしている子供がいるかもしれない。子供は大人に迷惑をかけたくないと考えている。子どもたちが本音を語れる機会をつくって頂きたい。



こころのサポートプログラムについて。こころのサポート授業1は、すこしでも安心できるような、絆を確認できるような、睡眠といらいをうまくコントロールできるようなプログラムを提案した。もう一つは、いろいろな学校でこころのサポートと防災教育を一体化した取り組みがあるはず。それらをぜひ共有して欲しい。こころのサポートに配慮した避難訓練の実践があった。海に近い甫嶺小・越喜来小・崎浜小3校合同で授業開始。4月25日津波を想定した避難訓練を実施したが、一人も心身の不調を訴える児童がいなかった。前日、クラス単位で、学校から山に上がる避難経路を確認していたためである。これは心理学的に見れば段階的練習法という大変素晴らしい取り組みである。

成長につながる表現活動。

アンケートは子供が大丈夫かを調査するものではなく、子どもたち自らが自分の心と体の反応について知るためのもの。心理教育とセルフマネジメントをセットにして行うもの。アンケートは表現活動だから、必ず個別相談を行うことで提案した。子どもたちに発達年齢に応じて、

トラウマや PTSD といったことを理解させる取り組みも続けていって欲しい。

アンケートの結果を見ると、沿岸部と内陸部の結果があまり見られない。しかし、同じ「いいえ」という回答であっても、深い喪失を抱えている沿岸部では、否認のプロセスが起こっている可能性がある。より詳しい分析結果を還元する必要がある。

被災にともなう体験の表現活動。そのことが語り継ぐ防災教育として貴重な教材になる。

NHK スペシャル「震災遺児 1500 人 子どもたちはいま」より、小2の女兒が担任への連絡ノートに書いた文章。彼女は、亡くなった両親・姉と心の中で会話をしている。こうした表現を引き出すことができたのは、担任の教育活動のたまもの。

気仙地区小・中学校長協議会が発行した「東日本大震災の記録」について、震災に伴う体験をこのようにまとめていく活動が、次の語り継ぐ防災活動につながる。

震災に伴う体験、見守りながら励ましながら分かち合うことが、大きな成長につながる。

この発表のはじめに提示した3つのことを、最後に再度提示してまとめとする。

